

館蔵企画展「大屏風展」

会期：2023年4月15日(土)～6月4日(日)

主催・会場：青梅市立美術館

第1展示室

① 《晩秋》 1936年、紙本着色、二曲一双、168.5×166.0(各)

田中 案山子 たなか・あんざんし 1906～1970

東京青梅に生まれる。本名格男。田中以知庵に師事。1929年、再興第16回院展で初入選。その後も出品を続けるが、36年、脱退し新興美術院を結成する。定期的に出品を続けていたが、その後公募展を離れ、個展を中心に活動した。

② 《苗園(春苑)》 1931年、紙本着色、六曲一隻、167.5×366.0

小山 大月 こやま・たいげつ 1891～1946

東京神田に生まれる。本名光造。松本楓湖の安雅堂画塾に入門。1914年の今村紫紅、速水御舟らの赤曜会に参加。1916年再興第3回院展で《桃花鳴鳩》で初入選。21年同第8回院展で再入選、のち入選を重ね、26年同人となった。院展を中心に品格のある花鳥画を描いて活躍した。聖徳太子奉賛美術展や新文展などにも出品した。

③ 《夢》 1910年代初め、紙本着色、二曲一隻、137.0×140.0

玉村 方久斗 たまむら・ほくと 1893～1951

京都に生まれる。本名善之助。京都市立絵画専門学校などを卒業後、菊地芳文に師事する。はじめ、院展に出品していたが、横山大観と確執を生じ、村雲毅一らと高原会を結成し、先鋭的な活動を行った。また、より自由な表現を求めて前衛的な三科造型美術協会の結成に唯一の日本画家として参加したり、日本画団体である方久斗社を主宰、独自の価値観を持って活躍した。随筆家玉村豊男は子息。

④ 《くずれゆく》 1992年、紙本着色、額装、176.0×1056.0

伊藤 彬 いたう・あきら 1940～

兵庫県尼崎市に生まれる。東京芸術大学日本画科卒業。新制作協会展で重ねて受賞、会員となる。創画会結成に会員として参加。山種美術館賞展に出品。実力中堅作家による日本画研究グループ「横の会」を結成。近年、創画会を退会、水墨を用いた重厚な作品を連作している。

⑤ 《奥入瀬》 1971年、紙本墨画、六曲一双、169.0×372.0(各)

戸田 浩堂 とだ・こうどう 1906～1982

埼玉県生まれ。日本画家・戸田康一の父。1960年に松林桂月を会長として結成された日本南画院による、翌年の第1回展において院賞を受賞した。

⑥ 《杜若(水精)》 1940年代後半、紙本墨画淡彩、二曲一双、163.0×170.6(各)

田中 以知庵 たなか・いちあん 1893～1958

東京に生まれる。本名兼次郎。別号に咄哉、咄哉州、一庵。上原古年に師事。1909年に松本楓湖の画塾に入門。翌年、巽画会に出品。紅児会、美術研精会にも出品。14年に同会審査員となる。19年、木鐸会を結成。29年に日本南画会同人となる。戦後は日展で活躍し、審査員もつとめた。戦時中に青梅市二俣尾に疎開した経験がある。

※《杜若(水精)》の収めてある箱 …第1展示室入口に展示

⑦ 《^{ろくさい}六彩》

1955年頃、水彩／紙、二曲一隻、66.5×86.2

中間 冊夫 なかま・さつお 1908～1985

鹿児島県川辺郡に生まれる。私立高輪中学校卒。川端画学校に学び、二科展に出品、また1930年協会展に《母子》など5点を出品し、H氏奨励賞を受賞する。独立美術協会展には翌年から毎年出品を続け、36年に独立賞を受賞、独立美術協会会友となる。40年には会員となる。戦後は独立展の他、美術団体連合展、日本国際美術展、現代日本美術展、国際形象展などに出品し、また、62年武蔵野美術大学教授に就任。重厚なマチエールによる半具象的な裸体表現に独自の作風を示し、戦後の具象絵画における一傾向を提示した。

高橋 忠弥 たかはし・ちゅうや 1912～2001

東京生まれであるが、青年期を盛岡市で過ごす。岩手師範学校卒。宮沢賢治を敬愛し、絵や文学に親しむが、油絵は独習である。1933年に独立展で初入選する。1936年画業に専念するために上京するが、戦時中は新聞社、通信社の特派員として中国大陆に渡った。65年から4年間滞仏。文学書の装幀も多く手がけた。著書に詩画集『巴里憂愁』『西洋絵画の話』などがある。

壺田 たけを もくた・たけを 1910～1987

兵庫県豊岡市に生まれる。本名武雄。1927年今里中学校を卒。僧侶で日本画家でもあった祖父の影響で画家を志し、当初は小泉勝爾に日本画を学ぶ。日本美術学院にも通い、のち洋画家須田国太郎に師事する。1935年第5回独立展に《鉄屑等ある風景》で初入選し、以後同会に出品を続ける。57年独立賞を受賞し、59年独立美術協会会員となる。63年上京。初期には穏やかな田園風景を多く描いたが、のち前衛的な制作へと移行し、板、布、金属などの廃材を使ったアッサンブラージュや、立体作品を手がけるなど、前衛的活動を展開した。

山本 正 やまもと・せい 1915～1979

岡山県生まれ。京華中学卒。里見勝蔵、野口弥太郎に師事。1931年独立展に《壁による男》が初入選。翌年独立賞を受賞。48年に岡田賞を受賞し、翌年に独立美術協会会員となる。56年から翌年にかけて渡仏。日本大学芸術学部教授を歴任。

山田 栄二 やまだ・えいじ 1912～1985

福岡市生まれ。修猷館中学（現在の福岡県立修猷館高等学校）卒。1933年二期会に初入選し、翌年より独立美術協会展に出品。38年独立賞を受賞し、47年に独立美術協会会員となる。53～57年渡仏。73年に再び渡仏し、長く現地で暮らす。アンフォルメルの影響を経て、詩情のある幻想的な作風を色彩豊かに展開した。

斉藤 紅一 さいとう・こういち 1904～1996

東京日野に生まれる。はじめ文学を志すがのち、太平洋画会研究所に学ぶ。1930年協会を経て、二科展や独立展に出品、以後独立展を中心に活躍する。1963年独立美術協会会員となる。銀座資生堂ギャラリーで個展多数開催。

⑧ 《ろうばいじゅ ほうじゅばい老梅樹(宝珠梅)》 1970年、紙本墨画淡彩、四曲一隻、180.7×361.2

岩崎 巴人 いわさき・はじん 1917～2010

東京に生まれる。本名弥寿彦。1934年玉村方久斗のホクト社展に出品。36年川端画学校を卒業し、小林古径に師事。再興院展に出品、院友となる。58年日本表現派の創立に参加。水墨画の第一人者で、現代の異色画家として知られた。

⑨ 《山水図(赤壁)》 1890年代、絹本金地墨画、二曲一双、153.7×155.0(各)

川合 玉堂 かわい・ぎょくどう 1873～1957

愛知県に生まれる。本名芳三郎。画家を志し、京都に出て望月玉泉、幸野樸例嶺に師事、四条派を学ぶ。また、橋本雅邦に師事し、上京する。数々の展覧会で入賞を重ね、日本美術院の創立にも参加する。近代日本美術の中心にあって活躍し、文化勲章受賞。後進の育成にも力をいれ、私塾や東京美術学校で教鞭をとる。戦時中青梅御嶽に疎開し、終生そこで暮らした。

⑩ 《山水図》 1912年、絹本金地墨画、二曲一隻、168.0×184.0

山岡 米華 やまおか・べいか 1868～1914

高知県に生まれる。本名尚樹。はじめ南画を学ぶが、父の反対により上京して裁判所書記となるが、大審院判事であった南画家川村雨谷に師事、のち画業に専念する。中国を訪れ明清画を研究。日本美術協会展、日本画会展で受賞、日本南画会参加の後、松林桂月らと日本何宗画会を結成。文展では正派同志会を結成し、出品、審査員もつとめた。

⑪ 《屋久島所見》 制作年不詳、紙本着色、二曲一隻、100.0×180.0

後藤 芳仙 ごとう・ほうせん 1901～1987

東京深川に生まれる。1921年関西美術院卒業。日本美術院展で複数回入選を果たす。女子美術大学にて日本画講師をつとめ、武者小路実篤の推挙により、新しき村の美術部や大調和会のメンバーとして出品を行った。

常設展示

展示ロビー

- ① 《雪白釉釉描色絵黄鶺鴒図壺》 1986年頃、磁器、27.5×23.5(径×高)
- ② 《草白釉釉描色絵水辺小禽図壺》 1988年頃、磁器、23.5×28.0(径×高)
- ③ 《雪白釉釉描色絵銀彩花鳥図壺》 1989年、磁器、14.0×24.5(径×高)
- ④ 《雪白釉釉描色絵金彩月と鴨の図四角小筥》 1988年頃、磁器、20.9×20.9×8.9

藤本 能道 ふじもと・よしみち 1919～1992

東京に生まれる。1941年東京都美術学校工芸家図案部卒業。42年加藤土師萌に師事。44年宮本憲吉に師事。66年日本工芸会正会員となり、東京芸術大学教授を経て、83年同大学資料館館長、85年同大学長となる。90年退任。73年青梅市梅郷に築窯。86年重要無形文化財保持者（色絵磁器）に認定。91年勲二等旭日重光章を受章。

小島善太郎コーナー

- ① 《猫》 1981年、油彩／カンヴァス、72.8×60.6
- ② 《中村覚肖像》 1932年、油彩／カンヴァス、91.0×72.8
- ③ 《婦女立像(女人像)》 1974年、油彩／カンヴァス、162.1×112.1
- ④ 《パリー郊外》 1981年、油彩／カンヴァス、60.6×72.8
- ⑤ 《梅の丘》 1936年、油彩／カンヴァス、27.3×45.5

小島 善太郎 こじま・ぜんたろう 1892～1984

東京に生まれる。1918年二科展に入選。22年フランスに留学し、留学中の23年サロン・ドートンヌに入選。帰国後26年に前田寛治、佐伯祐三ら5名と一九三〇年協会を結成。30年に里美勝蔵、福沢一郎ら14名と独立美術協会を創立。同会を中心に活動した。生誕の地は現在の新宿区だが、フランス留学後は八王子市や日野市に長く居住したことから、多摩地域ともゆかりが深い。51年に青梅市在住の吉川英治、川合玉堂の計らいにより、市内で個展を開催。その後は青梅美術協会の絵画指導に長年携わり、当館設立の契機のひとつになった。